12 評論

国字作成のメカニズム

阿辻哲次

国字を苗字に持つ体験から、そのルーツとメカニズムについて論じた言語学的な文章

Ⅰ

数年前まで、初対面の中国人と名刺を交換する時には必ずといっていいほど、貴殿の姓には妙な字があるが、この「辻」というのはいったいどういう意味であるか、まともな漢字なのか、それとも日本で作った記号のようなものなのか、また漢字であるとすれば、中国語ではいったいなんと読めばいいのか、などとあれこれと尋ねられたものだった。筆者がはじめて北京に暮らした頃（一九八〇年）は、まだ日本人がそれほど中国にいなかったものだから、会合などの折りに差し出した名刺にある「辻」でずいぶん議論がはずんだものだ。他の人ならものの一分もあれば自己紹介が済んでしまうのに、筆者の場合は「辻」に関して話に花が咲くので、まず五分は必要だった。*

いうまでもなく「辻」は「畑」や「畠」、「榊」、「鴫」などと同じように日本人が作っ

問1 「話に花が咲く」のはなぜか。

た文字であり、中国にはこれらの漢字がもともと存在しなかった。このような和製漢字を、日本では「国字」と呼ぶ。*

中国に存在しない漢字には、もちろん中国語の字音がない。しかし中国では日本人の姓名が中国語で発音される。山田さんはShāntiánさんであり、中川さんはZhōngchuānさんである(その逆にMáo Zédōngと発音される毛澤東を日本では「もうたくとう」と呼んでいる)。だから筆者のように国字を姓名にもつ者は、その字に関して本来は存在しない中国語での字音をみずから創作しなければならないことになる。

ただし国字の中国語音をまったく勝手に作っていいというわけではなく、一定の原則らしきものがないわけではない。漢字の大多数は「形声文字」、すなわち意味を表す要素である「意符」と発音を表す要素である「音符」の組み合わせで作られているから、これらの和製漢字も形声文字と同様に考え、字形の右半分(いわゆるツクリの部分)に基づいて字音を作り出すことになる。「辻」ならばシンニュウの上にある《十》によってshí(《十》の中国語音、以下同じ)と、「畠・畑」なら《田》によってtiánと、「榊」なら《神》によってshénと発音する、という次第である。

このような国字の中国語音がいつ頃できたのか、またこの形声の原理を逆に利用した読み方をはじめたのが中国人なのか、それとも日本人なのか、少し調べたのだが筆者にはまだわからない。しかし近年に日中間の人的交流がさかんになるにつれ

問2 「国字」には、どのようなものがあるか。

注1 Shāntián
「山田」の中国語読みのアルファベット表記。

注2 毛澤東
(一八九三〜一九七六)
中国の政治家、思想家。

問3 「漢字の大多数」はどのようにして作られたか。

て、国字の中国語での読み方がかなり定着したようで、現代中国のもっとも規範的な辞書である『現代漢語詞典』にも「辻」など和製漢字が収録され、右半分を声符として字音を定めている。ちなみに「辻」にはsānと音注が施され、意味の欄には「日本漢字、十字路口、多用于日本姓名」と記されている（一九九六年修訂第三版）。おかげで最近は中国で自己紹介する時にかかる時間がずいぶん短くなった、というのが、国字を姓にもつ者の印象である。

Ⅱ

中国語での発音を定める際には国字を形声文字と見なすことが多いが、しかし実際の造字では国字は「会意」の方法で作られたものが圧倒的に多い。会意とはいくつかの要素を使って文字を作る時に、それぞれの要素がもつ意味を総合的に組み合わせて、全体としての意味を導き出す方法で、たとえば《人》と《言》を組み合わせて「信」という字を作り、「人間の言葉は誠実である」ということから「まこと」という意味を表すごとき方法である。

実際に会意の方法で作られた国字について、以下にいくつか例をあげる。

《几》（風の省略形）＋《止》で「凪」

《木》＋《神》で、「榊」（神にお供えする木）

《魚》＋《雪》で、「鱈」（雪の季節の魚）

《衣》＋《上》＋《下》で、「裃」（上下そろいの衣）

《人》＋《夢》で、「儚」

《身》＋《美》で、「躾」（身体を美しく見せるための教え）

この方法は漢字の意味に習熟している日本人にはたやすく理解できるもので、上にあげなかった例でも、「鴫」「峠」「颪」などは、そのなりたちが即座に理解できるであろう。

大多数の国字はこのように会意で作られている。しかし中には、ごくまれだが形声の方法に準拠して作られた国字もある。同様に例をあげれば、

《金》＋《遣》（読みヤリ）で、「鑓」

《手》＋《窄》（音サク）で、「搾」

《金》＋《兵》（音ビョウ）で、「鋲」

《月》＋《泉》（音セン）で、「腺」

《魚》＋《康》（音コウ）で、「鱇」

《人》＋《動》（音ドウ）で、「働」

などがその例である。ここでの音符（形声文字で発音を表す要素）は、上の例では「鱇」だけを例外として原則的に音読みが使われるから、これなら中国人にも比較的理解しやすい。実際に「腺」や「働」などは「逆輸出」*され、今の中国で使われる漢字ともなっている。

さらにまた、字音を利用するものの外に、たとえば《麻》と《呂》をあわせて「麿」としたり、《久》と《米》をあわせて「粂」とするように、二つの漢字を合成し、それぞれの日本語での読みをつなげて全体の読みを作り出すというユニークな方法まである。この例はあまり多くないが、中国では鹿の一種を表す「麑」を上下に分けると《鹿》と《児》になることから、「麑」一字で鹿児島という地名を表す文字として使うのも、「麿」などと同様の発想によるものである。

ところでこのような「国字」は、そもそもいつ、だれが、どのようにして作ったのだろうか。この問題に正確に答えるのは非常に困難なのだが、しかし現在までの出土資料から考えれば、国字はすでに奈良時代から使われていたことがわかっている。和銅三（七一〇）年から[3]延暦三（七八四）年まで[4]都であった平城宮跡から近年大量の木簡が発見されており、その中に「鰯」という字が見える。「鰯」は《魚》と《弱》

問4　ここでいう「逆輸出」とは何を指すのか。例を挙げよ。

注3　和銅（七〇八～七一五）奈良時代、元明天皇の代の年号。

注4　延暦（七八二～八〇六）奈良後期～平安初期。桓武天皇の代の年号。

注5　木簡　文書などを記録した小さな木の札のこと。荷札として使われたものが多い。

を組み合わせ、「弱いサカナ、すぐに死ぬサカナ」という意味で、会意の方法で作られた国字である。しかし平城京の前に都とされていた藤原宮跡から発掘された木簡にもイワシは登場するのだが、そこでのイワシは音仮名(万葉仮名)*で「伊委之」と書かれている。そのことから考えれば、もともと漢字では表現できない事物や概念を日本人は万葉仮名で書き表していたのだが、それがある時期から専用の文字を作って表現するようになっていった、と考えられる。その変化の背景には、もちろん正規の漢文の学習が普及し、漢文の形式に準拠した文書の作成が要求されてきたという事実があるのだろう。仮名書きは、たとえそれが漢字を使った万葉仮名方式であったとしても、やはり格式が一段低いものと認識され、それで国字が作られたと考えられる。

Ⅲ

国字作成の時期は一概にはいえないが、それではいったいどのような概念が、わざわざ国字を作ってまでも表現されたのであろうか。これに関して誰もがすぐに思いつく答えは、中国には存在しない事物である。漢字は表意文字であるから、現実に存在しない事物については文字が作成されない。

問5 「万葉仮名」とは、どのようなものか。

今の中国にはイワシの缶詰が輸入されているので、現代の中国人がイワシを知らないわけではない。しかしその魚を今の中国語では「沙丁」と書き、shādīngと発音する。すなわち英語のsardineの音訳語であって、イワシを表す専用の漢字はこれまでの中国では一度も作られたことがない。古くから「地大物博」(大地は広く、物産は豊富である)という言葉で形容される中国であるが、こと海産物に関してはいささか貧弱であって、古代の中国人はおそらくイワシという魚を見たことがなかった。中国で古代の文化が栄えたのは黄河流域の内陸部であり、これまでの時代では一生涯海を見ることなしに世を去る人の方が圧倒的に多かった(それは今でも変わらない)。それに対して、わが国は四方を海に囲まれており、生活物資の多くを海から得てきた。中でも魚類は種類が非常に多く、資源としてもきわめて恵まれた状況にある。日本人が昔から食べてきた魚がすべて日本固有種というわけではもちろんないが、しかし中国大陸の食生活には登場しないものが多く、結果としてその魚を表す中国製の漢字が存在しない。かくして《魚》を偏とした大量の国字が制作された。ちまたでよく話題になる寿司屋の大きな湯飲みに書かれる魚偏の漢字は、その大部分が国字であり、同様の現象が植物についても指摘できる。

中国と日本とでは生活環境や文化の面で共通するものが多くあるが、同時に日本だけにしか存在しないものもあった。日中で共通するものについては、もちろん中

国で作られた漢字を輸入して、それで日本語を書き表してきたが、しかし日本固有の事物や概念を表すには、中国製漢字だけではどうしようもなかった。それで、それを補(おぎな)うために、漢字の構成原理に従って新たに作った文字が国字、というわけである。[1]

出典　『漢字のいい話』（大修館書店・二〇〇一年刊）

著者紹介　阿辻　哲次（あつじ　てつじ）

一九五一年、大阪府生まれ。漢字を中心とした中国文字文化史が専門。『漢字を楽しむ』（講談社現代新書）、『部首のはなし 漢字を解剖する』（中公新書）など、漢字に関する著書多数。

まとめ

1 なぜ国字を作る必要があったのか。

2 国字作成の方法には、どのようなものがあるか。